

角川源義賞「文学研究部門」選考委員会より

周到な分析と鋭い感性の拓く中世和歌表現史論

原岡文子

王朝貴族文化への憧憬を踏まえ、未曾有の歌壇の活況のもとに『新古今和歌集』の成立を見た中世は、俊成、定家の名歌はもとより、むしろ古代以上に多くの人々によって和歌が詠まれた時代でもあった。古代和歌を受け継ぎつつ、中世和歌はどのように固有の表現を達成したのか。本書は、その詩的達成を、曾禰好忠、和泉式部等、源泉としての古代和歌から、本居宣長に至る近世までを視野に入れ、「様式」と「方法」という語に焦点を絞って明快に解析する射程の長い表現史、文学研究の優れた成果である。

その意味で研究の王道を行く本書は、けれども同時に、歌壇の動向等と和歌をその外側から捉えようとする傾向の目につく従来の和歌研究の姿勢とは、実は大きく異なる視座が際立つ。本書の大きな特色は、和歌の外側より、むしろ和歌の「作り手」、「作者」の側に立つ

て、具体的な和歌のことばに可能な限り寄り添いつつ、著者固有の鋭い感性と細密な実証に基づく極めて果敢な読みを周到に開示する姿勢にある。題詠、定教歌等の定着により促された中世和歌の「様式化」と、歌人主体はどう切り結ぶ「方法」を獲得するのか。「類型的な性格をもつ表現のあり方」を意味する「様式」とは、煎じ詰めることばをめぐる「連想」の定式化だと、著者は序章に説く。だからこそ連想の編み目の中に主体の発想がどう選び取られるかという構図、作り手の「方法」と「様式」との交錯、せめぎ合いの中に、中世和歌の核が炙り出されることとなる。「自分を他者の目で見る」和泉式部の発想の系譜に、やがて西行詠の「演技」、そして俊成の「縁語的思考」による表現が立ち現れ、また連想の編み目の間に「空白」を置く定家の方法が生まれる。「演技」「縁語的思考」の鍵語を梃子に、中世和歌表現の達成を実証する著者の分析過程は迫力に溢れ、結果的に浮上する各々の和歌の輝きが、なお一般読者をも魅了してやまない展開となっている。